

■ 体験版 ■

# シチユえつち

— Situation 2. 俺の親父に買われたJK —

なつめ

夏目

なつめ

棗

## □□注意事項 □□

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大（125%くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 平良 静香(たいら しずか) || 鬼董学院(きとうがくいん)三回生。身長… 167  
cm、体重… 52 kg、スリーサイズ… 94(Fカップ)・57・89。



軽くウエーブの掛かった髪は腰まであり、セーラー服の胸元を押しあげるは学院女子としては、かなりけしからんボリュームである。何気に「エス」だが、言葉責めで

弄るのが好き。自称《童貞キラー》。(彼女は『壁穴の向こうで今日のお当番が待ってる』♥ Situation. 2 必殺! ツンロリの介助』の裏ヒロインである。)

● 神代 梢(かみしろ こずえ) || 最近人気急上昇中の新人グラドル。身長… 167cm、体重… 48kg、スリーサイズ… 93(Fカップ)・56・89。自分の事を『コズるん』と呼ぶ。

● 白木 琢也(しらき たくや) || もうじき三十になるうかという歳で、見てくれも歳相応である。お嬢さま学園として名高い『聖隷雙葉(せいれいふたば)』の教師。

白木 琢也(しらきたくや)がいつも通り夕方六時に帰宅すると、居間のソファアームにセーラー服姿の見知らぬ女子が坐っていた。

好みのタイプでちよつと、どきつ、としたのを押し隠して琢也は訊いた。

「だ、誰っ？……ですか？」

琢也は父親と二人暮しである。見覚えのない侵入者に怪訝な顔で問い掛けた琢也に彼女は呆気らかんと答えた。

「貴方のお父さまに買われた可哀想な美少女ですう！」

「………じ、自分で……美少女、言う？」

「ええっ？………わたしい、美少女くないい？」

——つて言うか、突つ込むトコ、違くないか？

「ど、どうやって、入った……？」

「お父さまに合い鍵を戴いて入ったのよ………決まってるじゃないっ！」

——いや、だから………突つ込むトコはそこじゃなくてっ!?

(親父に買われた………つて、言わなかったか?)

イニシアチブを取り戻せずに途惑う琢也に構わず彼女が言った。

「貴方が琢也君ね? ……わたしは、平良 静香(たいらしずか) ……静香ちゃんって呼んで良いわよう♪」

「た、琢也君……って!?!」

いきなり『君』付けで呼ばれた琢也が鼻白む。

琢也はもうじき三十になろうかという歳で、見てくれも歳相応である。一方、彼女は幾分大人びた風貌だがセーラー服姿に違和感を感じる程ではなく、どう見ても明らかに彼女の方が歳下……それも、かなり歳下であろう。

(いや、それよりも……『親父が買った』って……どういう意味だ!?!)

琢也の父親は六十過ぎである。母親は——つまり父の連れ合いは他界しているので所謂『自由恋愛』であれば問題はなからう。しかし、息子より歳下の……。

(って言うか……『親父が買った』ってコトは、つまり……え、援助交際………  
そ、それはいくら何でも……ま、拙いだろっ!?)

彼の父親は帝都大学の文学部教授である。いや、今は確か、文学部部长だった筈である。それが息子より歳の離れた学院女子と援助交際した……などと、世間に知られたらスキャンダルもいいい処だ。

(つて言うか……あの堅物親父が援助交際つて……あ、ありえねえだろがつ!?)  
琢也は居間のソファーに悠然と足を組んで寛ぐ彼女に改めて視線を投げた。  
(しかもこんな美少女が……お、オーケーしたのかよっ!?)



改めて確認するまでもなく、自己申告通りの美少女である。  
軽くウエーブの掛かった髪は腰まであり、セーラー服の胸元を押しあげる学院女子  
にあるまじきけしからんボリュームは……これは、歳相応とはいえない……かも？

「むふんっ♪……………94のFカップよう♪」

琢也の視線を敏感に感じとった静香が上目遣いでその視線を絡み取る。

(い、いや……き、訊いてない……から……)

更に両手でセーラー服の胸元を、たぶんっ、と揉みあげて彼女が訊いた。

「……他のサイズも知りたいのう？」

(い、いや……だ……から……)

イニシアチブ処かペースまで静香に握られて視線を泳がす琢也を、彼女のひと言が更に地獄へと突き落とす。

「たつくんって……童貞でしょ？」

「※□@¥○×◇\*——っ!？」

(……………い、い、いきなり……な、なにを……き、訊きやがりますか!?)

あからさまにパニくって返事に窮した時点でイエスと答えたも同然であった。

自分より一廻りも歳下の——しかも今日初めて会った少女に、何故こんなコトを訊かれなければならぬのか。憤(いきどお)りよりも情けなさが去来する。

「そ、そ、そんな……コト……き、君に……」

必死に平静を装って否定の言葉を紡ぐ琢也に、しかし、静香はあっさりとスルーし



て笑顔で言ったのだった。

「ねえ、お腹すいた……」

結局、先程の返事はウヤマヤになった（……と、琢也は思いたかった）が、二人分の夕食を作らされた琢也は、更に食後のコーヒーまで淹れさせられていた。

「ご馳走さま、美味しかったわあっ ♪ ……たつくん、もういつでもお嬢さんに行けるわねっ ♪」

（余計なお世話だっ！ ……って言うか『たつくん』って……なにっ！）

「そ、それより……何処で親父と……その……し、知り合ったんだ……？」

それは、琢也にとって実になる問題だった。いや、それより『あの堅物親父が援助交際』という非現実感を拭い去りたかったのかも知れなかった。

「『蒼樹の杜（あおきのもり）公園』……って知ってるでしょ？」

「ああ……」

それは、この街の人間なら誰でも知っている街の中心部にある公園だ。

「あそこの前の商店街って、平日でもホコテン（歩行者天国）だから、露店が並んでるのね……それで、アクセを物色したら後ろから声を掛けられたの……」

「……お、親父が、君に……こ、声を？」

『あの堅物親父』が路上でナンパ……非現実感が更に増した。

「振り返ったら三つ揃えに山高帽のオジサマでしょ？ ……てつきり、わたしじやないと思っただわよ……」

自分に向けて掛けられた言葉ではない……とは思ったが、静香はさりげなくその場を離れようと歩き始めた。

(や、やだ……付いてきてる?)

一〇メートル程歩いて、そつ、と振り返ると目が合ってしまった。

(な、なにっ? ……もしかして、補導員?)

そう思った時、間を詰められていた。

「失礼ですが……」

「わ、わたし……何も違反とか、悪い事なんか……」

静香は制服のポケットから学生証を取りだして相手の目の前にかざした。

「こ、これ……学生証……」

相手の男は静香の行動に何か途惑うように小首を傾げて帽子を取った。

「こ、これは失礼しました……私は、こういう者です……」

男は上着の内ポケットを探ると分厚い財布を取りだし、その中から何やら身分証のような物を抜きとって静香に差し示した。

「えっ？ ……あ、あの？」

想定外の男の行動に今度は静香が途惑いを見せる。

(……って、帝都大の……ぶ、文学部……部長くっ!?)

お互いの身分証を確認し終えて男が口を開いた。

「平良(たいら)さん、ですか……突然、お声を掛けて申し訳ありませんでした……実は、少々お願いしたき儀がございまして……」

「は、はいい？」

補導員ではないようだが、大学の先生が自分のような学院女子に何の用だろう。

「でね、『お茶など飲みながら話を聞いて貰えないか』……って言われて、まあ……

あの辺りって小洒落たオープンカフェとかあるし、良いかって思っ……」

(……いや、だから、あの堅物親父が……な、ナンパっ!?)

言葉を失った琢也に構わず静香が続けた。

「でね、貴方のお父さまが先にたって、すた、すた、歩いていくから、仕方なくついていったのね……そしたら、わたしのオキニなカフェも過ぎて、ちよい残念とか思ってたらホコテンも終わって……えっ？ どうするのよう？ ……って思うじゃない？」

「……………」

「なんと、そのまま『蒼樹の杜公園』に入っていくのよね……まあ、わたしとしたら、ついていくしかないわけよう！」

「……………」

一、二歩後ろをついて歩きながら、何処まで行くのか不安になりはじめた頃、大学の先生が振り返って言った。

「ここで宜しいかな？」

彼の前には至極普通のベンチがあった。仕方なく静香がそのベンチの端に腰を降ろすと、彼が重ねて訊いた。

「飲み物は何が宜しいかな？ 若い方の好みは判りませんか？」

彼の視線を辿ると、ベンチの横にジュースの自販機が立っていた。

「……………(ぷっ)……………それでは、オレンジジュースを……あつ、炭酸の無い物を……」

笑いを堪えて答える静香を眩しそうに見遣って、二人分の飲み物を購入した大学の先生は彼女の反対側の端に腰を降ろしたのだった。

『貴方のお父さまに買われた』と自己申告した少女の何ともな話に、琢也は理解が追いつかないでいた。

あの親父、いや『あの堅物親父』が路上でナンパ……更に、あろう事か公園のベンチで『お茶』した……ってえっ？

(い、いや、まで……そ、それらは……と、ともかく……こ、こ、この娘(こ)は……お、お、お、お、オーケー……し、し、したのか?)

「ああ、そうそう……たっくん、これ、お父さまに返しておいてね……」

琢也の途惑いに気づいているのかいないのか、静香はそう言いながら学生鞆から取り出した『モノ』をテーブルの上に置いた。

「そ、そ、そ、それってっ!?!」

その『分厚い財布』は琢也にも見覚えのある父親の持ち物に思えた。

「こ、こ、こっつ!」

それは『あの堅物親父が援助交際』という非現実感を立証する《モノ》に違いない

……ように、思えた。

(……って言うか 財布丸ごと……って、あり得るのか？ ……い、いや、いや、そもそも幾ら入ってるんだ、あの厚さはっ！)

琢也は父親が支給された月給（彼の大学では未だ銀行振込みになっていない）を銀行に入金するのを面倒がって財布に入れっぱなしにしているのを知っていた。

(親父の月給って、確か………い、いや、いや、それを丸ごとって……ま、まあ、確かに……か、可愛い……けど……だからって、あの財布、あれを……ま、丸ごと……は、無いよ……なあ……)

琢也の百面相をさも可笑(おか)しそうに見遣っていた静香が笑いを堪えて言った。

「まあ、わたしの価値をこの『厚さ』に見合おうと思ってくださったのは……うふ、光栄ですけど……幾らなんでも多すぎるから……」

琢也にとつても当然と思える彼女の判断を聞いて少しく見直した処で、それをぶち壊すような事を静香は口にする。

「ああ、そうそう……今夜の替えの《おぱんつ》代だけ戴きましたって……ちゃんと、伝えてください、ねっ♪」

「……………」

「どんなのか、確認しときますう？」

無視をきめた琢也を揶揄（からか）うように静香はテーブルの下でスカートを、ひら、ひら、させてみせる。

—— 勿論、テーブルの対面に坐っている琢也に見える筈はなかった、が。

更に、小悪魔少女が琢也を挑発する。

「さうてとう……ご飯も食べたしい、お風呂にしますう？ ……それともう、あ・た・しい？」

歳が一廻りも違う少女のあからさまな挑発に、些か憤慨した琢也は立ちあがって投げつけるように言った。

「風呂はその奥だから……沸かし方くらい判るだろ？」

「えっつ、一緒に入ろうよう……」

「こ、断るっ！ ……あと、親父の寝室はこっちの奥だから……」

それだけ言っつて自分の部屋へ引きあげようとした琢也に静香の声が追いつがる。

「ねえ、たつくくん……お風呂に入るからパジャマを貸して？」

「し、知らん、しらんっ！」

処が、勝手についてきた静香が琢也の部屋に入るなり、華やいだ声をあげた。

「やだ、やあだっ……たつくんってば、おっぱい星人なのう？」

静香の視線が壁に向けられているのに気づいた琢也は、彼女を部屋に入れてしまった自分の迂闊(うかつ)さを激しく後悔した。



壁に貼られたそのグラドルの等身大ポスターは、彼の「誰にも内緒の密(ひそ)かな  
愉しみ」だったからだ。

「ふうん、たつくんってばあ……『コズるん』のファンだったんだ……」



「こ、コズるん……って……なんで？」

神代 梢(かみしろ こずえ)——最近人気急上昇中のバスト93cm(Fカップ)の新人グラドルである。そして、梢のファンなら彼女が自分の事を『コズるん』と呼んでいるのを知っている。だから勿論、琢也も知っていたのだが……。

(な、なんで、この娘(こ)が知っている!?)

それに、もうじき三十になるうかという歳だからと言って、自分の個室に何を貼ろうと他人(ひと)さまから『とやかく』言われる筋合いはない……のだが——。

「や、やだあ、この水着……透けてる、よね？」

これは気づかれたくなかった。

「そ、そんな……コト……な、ないんじゃ……ない……か……なあ……」

「うん、うん……透けてるよう、このビキニっ！……ほら、ほら、乳首のトコ……」

……透けてるうっ？」

「ま、まさか……そ、そんな、バカな……」

あくまで知らないコトと開き直ろうとした琢也に、しかし、静香が引導を渡す。

「この、透け水着ヴァージョンって……超、ちよっおっ、レアなんだってねっ？」

(いや、だから……な、なんで、君が、それを知っている!?)

勿論、静香が梢のファンだった訳ではない。クラスの男子から梢と静香のスリーサイズが殆ど同じだと聞かされて以来、何気に気になっていたのだ。と言うか、頼みもしないのにクラスの男子が色々教えてくれるのだった。

この水着ポスターは何やらクジを引いて当たれば貰えるらしいのだが、更にその当たりポスターの中でも極々稀少な確立で『透け水着ヴァージョン』というのがあるのだそうだ。ちなみにクラスの男子たちの経済力ではまだ当たりを誰も見ていないようだった。

「聖隷雙葉(せいれいふたば)の、セ・ン・セ・イ、があ、こんなヤラびいポスターにいったい幾ら、注ぎ込んだのかにやあつ？」

「ほひええええっ!？」

個人で何かを愉しむのにあたって、成人男性であれば『透け水着ポスター』を所有している事は罪ではあるまい。

しかし、お嬢さま学園として名高い『聖隷雙葉』の教師としては……果たしてどうだろうか。しかも、静香に指摘されたとおり琢也は他人に言えない額を注ぎ込んでいたのだった。勿論、他人に知られないようにアメゾンの通販を使つての事だったが。

その時、何か違和感というか、衣擦れの音に気づいた琢也が顔をあげると、下着姿

の静香がポスターの横でポーズをとっていた。

「……つてええっ!?!……な、なに……は、裸になって……」

「いや、いや……ぶら着けてるしい、おぱんつも穿いてますって♪」



平然と下着姿を晒して静香がウイנקを投げてよこす。

「ほら、ほおくらっ♪……コスるんと同じサイズだよんっ♥」

(ホントは、おっぱいはわたしの方が一センチ大きいけどねっ♪)

逆にウエストは静香の方が一センチ太いのだが、それはクラスの男子にも（学院の公式書類にも）内緒だ。更に、体重はより違いが大きいらしいのだが……まあ、コメントは差し控えておく。

「ねえ、ねえ、どっかなあつ？ ……コズるんに、似てるう？」

長い髪を隠すように後ろで束ねて静香がポスターのポーズを真似て見せる。

「い、いや、だから……男の部屋でそういう格好は、だね……」

「やだ、たつくんってば、学校の先生みたい……って、先生か！」

明らかに揶揄（からか）われているのは判るのだが、琢也には反撃の手立てが見つからなかった。

「でもう、下着なんてさ ビキニと変わらないじゃない？ ……それに、コズるんのポスターの方が、露出度、高いよねっ♪」

「……………」

「乳首もう、お毛けもう……アレもう……透っけ、透けっつ♪」

「いや、だから……ね？」

（あ、アレ……って……そ、ソレは、水着の皺……じゃあ？）

本当は、これが噂の『透け水着ヴァージョン』なのか……と、訝（いぶか）しんだ程

度の透け具合である。確かに『乳首』は確認した。『アンダーヘア』も、もしかしたらという程度だった。『スリット』に関しては『水着の皺』との判別が琢也にはできなかったのだ。しかし、お色気路線といっても「表のアイドル」だったらこの辺りが限界だろうと琢也は渋々納得していたのだった。

だから、それは、とても『透つけ、透けくっ♪』とは思えなかったのだ。

しかし、唐突に琢也はあるコトに思い至った。

(……………って、いうより……………な、生下着っ!?)

その瞬間、琢也は、**やや**、前屈みになってしまった。

そして、それに気づいたのかは判らないが静香は、にやり、と笑って言ったものだ。

「そうだ、パジャマでなくても……………そのワイシャツでいいよ♪」

「な、な、なに？」

近寄ってくる下着美少女に、たじ、たじ、の琢也はますます前屈みになってゆく。

「だから、たっくん お着替えるんでしょ？ ……その脱いだワイシャツをパジャマ

代わりにするから……………か・し・てっ♪」

「ちよ、まつ、てっ……………ち、近い、ちかいっ！」

近づいてきた静香の両手が琢也の胸元に伸びる。視線を落とせば紫色の小布に包ま

れた深い谷間が……。

慌てて視線を逸らすと、くす、くす、笑いが立ち昇る。

「別に、下着くらい見ても良いわよう？ ……だから、お着替え、お着替え〜っ ♡」

ワイシャツのボタンを外し終えた静香の手指が至極自然に琢也のズボンのベルトに伸びる。

「やつ、ちよっ……はう……そり、らめっ!?!」

静香の両手から逃れようと格闘する琢也の口から洩れる声は意味を結ばない。

「わたしのおぱんつ見たんだから……たっくんのおぱんつも見せて、ね ♡」

「だ、だ、だかりや……いみや、今は……」

「今は……？」

白々しく訊き返す静香を無視して琢也はワイシャツを剥ぎ取るように脱ぐと、彼のズボンのベルトと格闘中の彼女の手に押しつけた。

「もおう、せつかちさんねっ！」

受け取らされたワイシャツを仕方なさそうに羽織った動作の流れで、静香は器用に紫色の小布を抜きとってそれを琢也に投げて寄越す。

「……………はい、ワイシャツ借りたお礼よっ ♡」

「にゃ、にゃ、にゃんれすと……」

掌にぬくもりを伝えてくる紫色の小布に更に前屈みになった琢也はシドロモドロだ。  
——と、ワイシャツの前を合わせた静香が桃色な声をあげた。



「やだあくんっ♪……このワイシャツ、もしかして透けてるう？……たっくんの、えっちい♥」

幾分、頬を染めて身悶えしてはいたが、嬉しそうなのは気のせいだろうか。

「わ、判ったから……さっさと風呂に入れてっ！」

彼女の身体に触れる事はできずに、それでも追いだそうと手を、ひら、ひら、させ  
る琢也に静香が挑発を加速する。

「ええ〜えっ？ ……もう少し、たっくんのお部屋を、探検したいい♥ ……特に、  
えっちなご本やDVDの隠し場所……とかあっ？」

「そ、そ、そ、そんなモン……無いからっ！」

「う・そ・っ・きっ！」

シドロモドロで否定する琢也の視線が、ちらっ、と向いた方向へと静香がすかさず  
歩き始める。

「あや、そによ……へえと……ふ、ふろ、風呂に……は、入るんでしょ？」

慌てて静香の行く手をさえぎり琢也が出口へと誘導する。

「……さ、さあ……風呂沸かしてやるから……こ、こっち……来てっ！」

「それじゃ、たっくん……お背中を流してくれりゅうっ？」

「し、ま、せ、んっ！」

「ええ〜えっ？ ……一緒に風呂入る約束だったじゃないっ♪ ……お背中も流しっ  
こしようよう♪」



「だから、そんな約束は、し、て、ま、せ、んっ！」

あからさまな彼女の挑発に一々真面目に返答する琢也に、堪えきれずに苦笑を洩らして漸く静香は退出したのだった。

風呂場でもヒト悶着あったが、やっとの思いで静香を振りきって居間へ戻った琢也は、ぐったり、とソファアにへたり込んだのだった。

しかし、未だに『あの聖物親父が援助交際』という非現実感を拭い去る事はできずにいた。

ふと、何気に彷徨っていた視線が食卓の上に置かれたままの財布を捕らえた。

「……確認だけ、しとくか？」

誰にともなく口にだして琢也は立ちあがり財布を手を取った。中に父親の身分証を見つけてしまい、判っていた事だが、悄然とする。

しかも、どうやら札の束は全て諭吉らしかった。数える気にはならなかったが。

それから、どれくらい経っただろうか。

「お先にありがとうですっ……いい湯加減でしたわよっ♪」

バスタオルでも隠し遂せないけしからん膨らみを誇示するように両腕を後ろに組んだ静香が琢也を見下ろしていた。

「お風呂場に洗ったぱんつを干してあるけど……変なコトに使っちゃやくよっ♪」



「っ、使っちゃったのっ!」

「えくえっ? ……使わないのう?」

「……………っ!!」

(く、く、くっそ〜おうっ……ど、どヲしてくれよおうっ!!)

一廻りも歳下の少女に良いように揶揄(からか)われても反論さえできない不甲斐なさに、琢也は心の裡で呪詛の言葉を吐いていた。



その時だった。

「わきやあああああっ!?!」

見あげた琢也の眼前で彼女のバスタオルの前が、はらり、と解けた。

勿論、琢也に《念動力》などある訳もなかったもので、彼女のけしからん膨らみの圧力の成せる業だったのだろう。それでも、今夜初めて見せた彼女の――まさに歳相応の“素の表情”が新鮮だった。

「ちええっ！……まだ、見せるつもりなかったのにい、悔しいっ！」

バスタオルの前を直した静香が悔しそうに地団太を踏む。その拍子にバスタオルの裾が捲れて琢也の視線が乱れ泳いだのだった。

(にゅふふんっ♡……見てる、見てるぅ♪)

そして、小一時間後、琢也が風呂からでると、もう居間に彼女の姿はなかった。

(やれやれ、やっと親父の部屋に行ったか……しかし、親父のヤツ……ど、どうする気だよお?)

父親が帰宅する前に外出した方が良かったのではないか……という思いも度々脳裏をよぎっていたのだが、静香との騒々しいやりとりの間にすっかり何処かへ消えてしまっていた。

というより、未だに自分の父親と彼女との情事が現実感を持ち得なかったのだ。

(まあ、二階にあがっちまえば、下で何をしようが聞こえないし……朝になったら帰

るだろう……)

しかし、そう思いながら自分の部屋に戻った琢也は、がっくり、と脱力させられたのだった。彼女は琢也のベッドに入っていたからである。

「遅かったわねえ……うぷっ……もしかして、さっきのわたしの裸をオカズに、お風呂場で、しこ、しこ、してたのにかやあ？」

「するかーっ!？」

「ええっ? ……なんで、なんでっ? ……わたしのおっぱいって、たっくんの好みのサイズでしよう?」

「だ、だから……もう、いいかげん親父のトコへ行けよっ!」

「えくえ、だってまだ帰ってきてないしい……わたしは、たっくんと遊びたいっ♪」  
「俺は遊びたくないってのっ!」

「えくえ、でもう、これから《ひとりお遊び》するんでしょ?」

「ず、するかーっ!？」

「う・そ・つ・きっ! ……今夜のオカズ、あげたじゃないっ♪」

「だーっ! ……だから、もういい加減にしろっ! ……俺に構わず、この部屋からでてっくれっ!」

静香を追いだそうと怒りに任せて毛布を剥いだ琢也が、凍りつく。

「いやあ〜んっ、たっくんのおえっちい♪」

毛布の下に曝けだされた裸体を隠そうともしないで桃色の悲鳴をあげてみせるのは確信犯の小悪魔だった。

「そうそう……さつきね、お父さまからお電話があつてね……」

そして、彼女は何気に話を逸らし、小悪魔な囁きをすり込んでゆく。

「……今夜は帰りが何時になるか判らないから、たっくんと遊んでいなさいって……ねえ、何して遊ぶう？」

「……う、うそをつくな……」

「やっぱいい、えっちなお遊び、だよねっ？」

「だ、だから……」

抗議などあつさりスルーして話を進める静香に、琢也は次第に呑み込まれてゆく。

「ねええん、それじゃあ……どっちから、先にい、す・る・うっ？」

「な、な、ナに……をう？」

「だから、たっくんがしたいのか、わたしにさせたいのか、的なの？」

「だ、だから……な、なんだよ、それえっ？」

「もおう、判るでしょうっ？」

勿論、経験がなくても薄々は判っている。しかし、小悪魔はあえて教えてあげる風を装って琢也を追い込んでゆく。

「つ・ま・りい……わたしのう、おまんこを、弄るのとう……わたしに、おちんぼを、弄らせるのとう……どっちを先にしたいのかって訊いてるのう！」

歳はいつっていてもエッチ経験など皆無の琢也である。半裸の女子からの卑語満載での誘惑になけなしの理性も危うくなっていた。

「いや、なに、いつて……」

「はい、あと十秒……九、八、七、六……」

「ひいひいっ？」

「ぶっ、ブ〜っ……時間切れですっ！……おふえらに決定〜いっ♪」

「……………っ！」

どちらにせよ琢也にとって悪い選択肢ではなかったのだが、問題はそこではなかった筈だ。最早、琢也の頭の中から目の前の美少女が『親父が買った女』という認識を結ばなくなっていた。

「それじゃあ、まずは……おちんぼ、み・せ・てっ ♡」

「だ、だから、なに、言って……」

「わたしのも見たんだから、たっくんのも、み・せ・てっ♥」

「だから、聞けよっ！」

「さっきや今も、わたしのおっぱいや、おまんまんのお毛け、見たでしょ？」

「いや、見たでしよって……君が勝手に……」

「たっくんのも見せてくれたら、ご褒美に良いコトしてあげるわよう？」

「い、いい……コト……」

「舐め、なめ、とかあ……」

口端からピンク色の舌先を覗かせて、れるう、と唇を湿らせて小悪魔は続けた。

「……挟んであげてもう、良いわよう♪」

そして、小悪魔は毛布の胸元をこれ見よがしに、たふふんつ、と揺すってみせるのだった。

最早、琢也の理性は風前の灯だった。

「……だ、だかりや……さつさと、出れいきえ……」

滑舌(かつぜつ)の悪くなった琢也の意味不明の言葉などあっさりスルーして静香が尚も飛ばす。



「ほらあ、まずはパジャマを、ぬ・い・でっ♪……たつくんが脱いだトコわたしも  
見せちゃおうかな〜っ♪」

身体を起こしてベッドに坐った静香が、まとうように巻いた毛布から両足をだして  
挑発してみせる。つい先程、毛布の下は全裸なのは確認済みだ。

「ほら、ほら……早く、ぬ・い・でっ♪」

目に見えぬ糸に操られるように琢也がパジャマの上を脱ぐ。

「じゃあ、おっぱいねっ♥」

約束どおり(?) 静香が毛布の胸元を開(はだ)けると真っ白い双つの乳房が、たぶ  
ぷんっ、と揺れて琢也の視線がキョドった。

「つぎ、おズボンねっ♪」

最早、琢也は意識の抜けたマリオネットのようだった。目の前の美少女に魅入れら  
れたようにその言葉を実行に移す。パジャマの下を脱いだ琢也のブリーフの盛りあがり  
を静香が視線で、ねっとり、と舐め廻す。

「あらあ、良い子でちゅね〜っ……それじゃあ、こうねっ♥」

毛布を剥ぎとった静香はM字開脚した股間を片手で隠していた。勿論、下着は端か  
ら穿いていない。

しかし、その仕草にも琢也はアクティブな反応を返さない。まるで、ゲームかビデオでも見ているような琢也の反応に静香の方が些か焦れてきた。

ブーイングでも返ってきたら、**ちら見せ**、してやろうと思っていたのにアテが外れた格好の静香は、つつけんどん、に命令していた。

「つぎ、おぼんつ、脱ぐのよっ!」

命令されるままブリーフに手を掛けた琢也が、しかし、一瞬固まった。

まだ本来の理性は戻っていないようだが、躊躇(ためらい)を滲ませて投げられた視線に静香の背筋が、ぞくくうつ、と震える。

(これよ、これゝえっ♡……ちよい、オジサンだけど童貞ちゃんのウブ顔ねっ♡)

そして、暫し躊躇(ためらい)った琢也が後ろを向こうとした瞬間だった――。

「後ろ向いて脱いだりしたら、軽蔑しちゃうわよう?」

まるでタイミングを見計らったように言われてしまった。

「はううっ!」

兇悪な盛りあがりを見せるブリーフの真ん前に顔を寄せた静香が、にまつ、と笑って続ける。

「ほらあ、わたしにい、おしゃぶりい……させたいんでしょう?」

「……………い、いや……………あ、あの……………」

「そういうえば、先程の二択の選択肢では、確か、そんな結果に……………なっていた……………  
ような……………気が……………する。」

「ほらあ、ここ……………」

「琢也に向かって、んあゝつ、と大きく口をあけて静香が言った。」

「……………ここに、おちんちん……………挿(い)れたいでしょ？」

「…………………………つ……………」

「咽喉(のど)のう、奥にい、突っ込んでえ……………ずこずこ、するとう……………まるで、おま  
んこに突っ込んだ時みたいに気持ち好い……………って、彼が言ってたよう♪」

(まあ、『彼氏』じゃないけど……………)

「…………………………ぐびっ……………」

「思わず喉を鳴らした琢也を揶揄(からか)うように静香が嗤(わら)った。」

「……………ああ、そうか、そうだった……………ごめん、ゴメン……………たつくんてば、おまんこに  
突っ込んだコト、ないから……………比べようがなかったねっ♪」

「……………(一)、こ、この、アマ……………!!?」

「声にだせない怒りが琢也の頬を朱に染める。しかし、この憤りが羞恥心を追い遣っ

てくれた事に琢也は気づいていなかった。

そして、『仕上げ』とばかりに静香がその背を押した。

「さあ、さっ……漢(おとこ)を見せなさいっのう♪」

ここは覚悟を決めるしかなかった。

いや、緋い交ぜになった憤りと羞恥心とが、何やら興奮に置き換わって、琢也は目を瞑ると一気にブリーフを摺り降ろした。

その下から現れた彼の《逸物》は天を突いて下腹に貼りついていたのであった。

(や、やだあっ♪……たっくんのおちんぽって、凄くなあいい♡……こ、このサイズって、久々の大当たり、よう♡)

「にゅふふうんっ♪……まあだ、触つてもいないのにい、ぎんっぎん、ねっ♡……これって、つまりい、童貞おちんぽの『妄想力』ってコトう？」

「な、なんだよお……それっ？」

いつの間にか琢也は歳下少女にタメ口になっている。

「だからあ、わたしのう、おしゃぶりを妄想して、こんなに《勃起つき》しちゃったのよねえ、違うう？」

「うっ……くううっ!？」

「でもう、流石は童貞おちんぽねえ……淫水ヤケなんてしてない真っピンク色う♥」  
好き勝手に言われ放題だが反論できない琢也だった。

「たつくんって、お給料、ソコソコ貰ってるんでしょ？……《シロウト童貞》ってだけじゃなく、お水も未経験なのう？」

「そ、そういうのは……」

そういう形で済ますのは気が進まなかったからだが、改めてそれを言葉にだすのは何か憚られた。

「……って、言うよりい『聖隷雙葉(せいれいふたば)』だったら、周りに美少女が大勢いるでしょう？」

「いや、学園生に手なんかだしたら、即刻、懲戒免職になるってばっ!？」

「見つかったら、でしょ？」

「いや、だから……」

見つかるとか見つからないとか以前にそんな度胸はなかったのだが。

しかし、そんな琢也の心裡も、会話の脈絡も、まるで無視して静香が言った。

「まあ良いわ……それじゃスキンは自分でつけてね……」

「はあっ？……」

その言葉の意味を理解するのに数刻を要した琢也が、歳下の静香に対して微妙に敬語になって答えた。

「……も、持つて……ません……」

そんな琢也に、こっそり、艶めいた視線を投げた静香は、しかし、わざとらしく顔を顰(しか)めてから答えたものだった。

「嘘う……こんなバツチいモン……生でしゃぶれって言うのう？」

琢也にしてみれば、恥を忍んで《こんな姿》を初めて女性の前で晒したのだ。それも自分より一廻りも歳下の少女にである。いや、何か訳の判らない力に翻弄されて自分から《こんな姿》になってしまった……ような気もするのだが。

そして、莫迦にされているのも、揶揄(からか)われているのも、判っていた。

しかし、ここまでさせられたのに「お預け」——いや「中止」はあんまりというものだ。

「……ふ、風呂で洗って……きた……から……」

必死に言い募る琢也を嘲笑うように静香が重ねて指摘する。

「でもう……その後、おしっこしたでしょう？」

「ひいええっ!？」

(いや、そりゃあ……風呂あがってトイレ行ったけど……)

返事に窮する琢也を見あげて、すつ、と手指を伸ばした静香は彼の《根元》を握り起こし鼻を近づけると、くん、くん、と臭いを嗅いだ。

「ちよつ、待っ!？」

微妙に腰を退く琢也に静香は白々しく言ったものである。

「わたしい、こんなバツチいモン、生でしゃぶったコト、ないんですけどどう？」

(勿論、嘘だけどう……W)

「おしっこした後のおちんぽを生でしゃぶらせるなんてえ、信じられないわよねえ……ヤダなあ、たつくんつてえ、もしかして変態さんなの？ ……ふつう、彼女さんだって、んなコト、しないとと思うわよう？」

(勿論、嘘だけどう……WW)

「いや、だけど……その……」

顔を真っ赤にして琢也が視線を泳がせる。

輪にした真っ白い手指で《根元》を握られただけで、びく、びくんつ、と腰を震わせる琢也を可笑(おか)しそうに見あげて静香が妥協案を口にした。

「それじゃあ、たつくんが誠意をもって《お願い》できたらあ……そうね、考えてあ

「げても良いわよう？」

「お、おねがい……って、なんですか？」

どちらが歳上か判らないほど萎縮した琢也が、おど、おど、と敬語で訊き返す。

「うくん、とう？……そうね、それじゃあ、今夜一晚、わたしのう 奴隷になるって  
言いなさいっ！」

「ど、ど、奴隷いつ!?!……ば、莫迦言つて……」

流石に声を荒げた琢也に静香が白々しく答えた。

「あら、残念……交渉決裂、ね？」

そして、握っていた手指を離して《そこ》に、ちろんつ、と視線を絡ませて言った  
ものだった。

「それ……たつくんが自分でシヨリするしかないわねっ♪」

「……う……にう……」

何とも情けない声を洩らして絶句する琢也に静香が代替案を口にする。

「それともう……おしつことカウパーまみれのバッチいおちんぽを舐めさせられるん  
だからあ……あとでえ、わたしのおしつこを呑んで貰いましょうかしら？」

「ひいひい!?!……な、なに……い、言つて……」



「う。ぶ。ぶ。う……。でもう、たつくんのおちんぽは、イエスって言ってるみたいに、ぶる、ぶるん、って震えてるわよう？……。やっぱいい、変態さんのねっ♪」

「ち、ち、ちゲいますよっ！」

舌を縛れさせた琢也の視線が泳ぐ、およぐ。

「まあ良いわっ……。それで、手を打ちましょう♪」

「い、い、いや、いや……。だから、俺はオーケーなんて言っ……おわあっ!?!」

琢也の否定の言葉は途中で悲鳴に変わった。いきなり静香が《琢也》を口に含んだからだだった。

「ちよっ、待っ!?!……わひよおっっ♪」

悲鳴ではなかった……。かも知れない。

「んぶう……(じゅぼっ、りゆるう)……。ろう、ひもち……(ぢゅずっ、ずぶぶっ)……。いひれひよう?」

「はわう♪……。だから……。ちよっ……。ま、待って!?!」

(や、やべえっ……。気持ちいい♪)

——あんむっ、じゅるる、ちゅぶ。んぶっ、ずじゅう……。じゅるっ、じゅぶぶぶぶぶぶ……。ちゅぶっ、じゅるるるっ……。んん、んぐっ……。んぶっ、ぢゅずずっ、ずぶぶぶぶぶ……。ちゅぶっ、じゅるるるっ……。んん、んぐっ……。んぶっ、ぢゅずずっ、ずぶぶぶぶぶ……。

最初から全開で、吸いたて、舐め廻し、しゃぶり尽くされて琢也の腰が浮く。

「おあつ……ちよ、まつ……はひい……」

「んふつ、まはなひ『待たない』つ♪……（ずずず、ぢゅぢゅつ、ぢゅぼつ）……くふつ  
……らっふん『たっくん』……（じゅぶぶぶう、んぶつ、ずぶぶぶぶう）……はぶつ、はっへら  
らひ『立ってられない』っ？……んっ、んんっ？」

「あふう……な、なんへ、いつへるか……くへう……わ、わはりまへん『判りません』……」  
「りゅぽんっ！」

仕方なさそうに吐き戻した《逸物》を輪にした手指で扱きながら静香が笑う。

「……もおつ、たっくんの方が何言ってるか、判らないっ！」

「……………はっ……………ふう……………」

静香に握られた己の《逸物》に視線を落とした琢也が切なげに吐息を洩らす。

「にゅふふうんっ♪……………わたしのお口、気持ちいいんでしようっ？」

握った手指で、ゆっくり、扱きながら琢也を見あげた静香が誘い込む。

「続けて……欲しい、かにゃ？」

「……………お、おねぎや……お、お願いします……」

声を上擦らせて答える琢也に静香が笑いながら言った。

「それじゃあ、ひとつ保険を掛けさせて、ねっ♪」

「ふええ、え？」

疑問系の声を吐いた琢也を見あげて、はむんつ、と《逸物》の先端を口に含んだ静香が彼の両手首を掴んで背後に廻す。

何をされるのか些か不安の根ざした琢也だったが、再び包まれた暖かな口腔の感触に意識を奪われてしまい、背後で静香が彼の手指にしている事にはたいして気が向かなかった。

「……つう……つ……」

背後に廻された両手の親指に痛みを覚えて呻いた琢也は身体が利かない事に気づいて些か慌てた。

「……な、なに……つ？」

「まあ、悪く思わないでね……保険だから！」

「ほ、保険って？」

どうやら背後に廻された両の親指を何かで縛られたのだ気づいたのだが、琢也はそれだけで殆ど動けない事にも驚いていた。

「たつくんは、まあ乱暴するような人じゃないとは思っけどう……わたしより力は強

いいい……ね、保険だから……」

漸く『何故、こんな事をされたか』を理解した琢也は、半分呆れつつ、半分ほっとしていた。

「そ・の・か・わ・りい……極上の快楽をあげるわよう ♡ …… ……って、何だかこれ、悪女役のセリフみたいね、あはっ ♡」

身を震わせて、くっ、くっ、と悶えるように笑った静香は体勢を入れ替え、琢也の胸板を、つつ、とつついてベッドに押し倒したのだった。

「むふふうんっ ♡」

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

本篇では、この後はノンストップでエッチシーンです。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。